

Title	正常と異常：カフカの『雑種』における奇形性
Sub Title	Normalität und Abnormalität : Zur Anomalie in Kafkas „Eine Kreuzung“
Author	寺田, 雄介(Terada, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.268(77)- 285(60)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0285">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0285</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 正常と異常

—カフカの『雑種』における奇形性—

寺田 雄介

## 1 子羊から子猫、そして犬へ

フランツ・カフカ（1883-1924）の物語には実に多くの雑種が登場する。『変身』（1912）の人間と昆虫、『ある学会報告』（1917）の人間と猿、『狩人グラフィス』（1917）の生者と死者、『プロメテウス』（1918）の人間と石、『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは二十日鼠族』（1924）の人間と鼠。これらの主人公は人間の本性を保持しながら、もう一方で動物や、場合によっては無機物の本性をも含有している。本性が互いに相容れないまま、他方を斟酌することなく自らの法則に従って発展していき、次第に己の身体を精神的に引き裂く羽目になる。雑種たちがこれらの葛藤から脱するには、存在自体が衰弱するか、もしくは死ぬより他はない。しかし、同様の雑種でありながらも悲劇的結末を迎えることなく、「自ずと息を引き取る」<sup>1</sup>まで人間に温かく見守られている生物も存在する。それが『雑種』（1917）に登場する名前を持たない子羊と子猫の中間種である。

その生物は元来子羊だったが、「ほく」の代になってから子猫の要素が現れ始め、今や半分が子羊、半分が子猫といった様相である。さらに「ほくの臭いをくんくん嗅いだり」<sup>2</sup>しながら「ほく」にまとりわりつく様子を目にしていると、どうやら犬にもなりたがっているようだ、という奇想天外な話である。語り手である「ほく」が観察するところによれば、この生物は我々が知っているような羊と猫、または犬の性格や特色を正確に引き継い

ではない。「窓敷居で日の光を浴びながら身体を丸め、のどをゴロゴロ鳴らす」<sup>3</sup>様子はまるで人間に飼われた子猫のような大人しさだが、「子羊に襲いかかろうとする」<sup>4</sup>ところには、肉食獣としての猫の野生性がうかがえる。ときに子羊が露見し、また違うときには子猫が出てくるのだが、二つの種の登場の仕方は全く秩序立っていない。「ニャオとは鳴けず、鼠に対しては嫌悪の念を抱く。鶏小屋のわきでは、何時間でも待ち伏せているが、仕留める機会は、一度もものにすることがない」<sup>5</sup>という部分からは、猫の攻撃性が子羊の平和的な性格で麻痺しており、自分の中の相反する本性に交互に引っ張られて、この雑種は理性的な行動がとれなくなっていることがわかる。目の前にいる自分の兄弟を本性が襲いながら、同時に残りの本性が逃げ出すことを求める。名前は持たず、「無数の姻戚関係者」<sup>6</sup>はいるものの、「近い血縁者はひよっとすると一人もいない」<sup>7</sup>という孤独の中に生き、同じ種の仲間を持たないことから、子孫を残すことさえできない。この妙な発育をし始めたのは自分の代になってからであり、父親の代にはまだ「子猫というよりも子羊だった」<sup>8</sup>ことから、当時はまだ正常な種であり、生物学上の分類も可能であったことが読み取れる。しまいには子羊であることにも子猫であることにも満足せずに犬の本性を持ちはじめ、自分に死を与えることにより「分別ある行い」<sup>9</sup>を見せるように「ほく」に乞うているように見える。動物が有していない理性と分別を理解し、他人にもそれを求める姿は、確実に「ほく」と同じ人間へと近づいている。複数の動物の形態の狭間に取り残されてしまい、進化論的潮流の中で翻弄されてしまっている。「ほく」はこの奇妙な雑種について、「父から大した遺産は相続しなかったけれど、この遺産はなかなかのものだ」<sup>10</sup>と評する。子羊と子猫の二種類の遺伝子を受け継いだと同時に、この動物自体は父親から息子に受け継がれたものである。「ほく」がこの生物の遺伝的な性格に固執している以上、これを寓話の本質として捉えるべきであろう。遺産と遺産相続人とが不幸のただ一つの塊を形成しているこの物語は、遺伝それ自体がその宿命においてそうであるように、神秘的で破壊しがたい塊となっている<sup>11</sup>。

この異常な外見を持つ動物を、ゲルシヨム・ショーレム（1897-1982）は東方ユダヤのカバラ思想を元にして解釈した。この雑種の動物は、ヘブライ語で輪廻転生を意味するギルゲールという刑罰によって執行された、神が人間を裁いた結果であると彼は説く。人間の靈魂の罪過が、煉獄においてもなお浄化されない場合、その靈魂は別の人間の体に転生されずに、動物や無機物の中に容れ込まれるというのである。人間の肉体以外で人間の魂が再び生を始めるとき、それは東方ユダヤのギルゲール物語の中で、裁きの最中にある生として、罪深い生として、または甘んじて受けなければならない贖罪の生として扱われている。動物の肉体の中で生を全うしながら、動物の罪過に関与し、その靈魂の贖罪が得られるように、いわば肉体と連帯して助けていかねばならない<sup>12</sup>。したがってギルゲールの物語に登場する生物は、いわゆる前世の生によって蓄積された罪禍によって予め造りあげられており、一見罪がないようであっても、前世の贖罪を生まれながらにして義務付けられている存在なのだ。『雑種』における羊猫は、父の遺産である。カバラ思想をもって読めば、先代の所有物を息子が受け継いだというだけでなく、一族が代々蓄積してきた罪禍を一身に請け負って生まれた生物がこの羊猫なのであり、「ほく」はその生物が自ずと息を引き取るまで、救済者として常に側にいなければならない。そのようにして不遇な生物は苦しい生から救済され、最終的には死をもってその靈魂は安心立命の境地へと誘われる<sup>13</sup>。

また、キリスト教にとってもユダヤ教にとっても羊は信徒を導く動物であり、旧約聖書では王が羊飼いに、ユダヤの民は羊として描かれている。したがって子羊から子猫への変化には、防衛的で従順な動物から、攻撃的で支配欲のある動物への発展過程が見て取れる。しかしそれだけでは飽きたらず、この雑種の動物は犬の真似事までするようになる。この子羊から、子猫、犬への発展過程について、ヴィルヘルム・エムリヒ（1909-1998）は以下のように分析する。

それゆえこの奇妙な動物の発達は、平和的な子羊から戦闘的な猫を経

由して涙を流す犬へと進む。しかし、直線的な発達ではない。なぜなら、子羊の存在の中にすでに猫の諸特徴があるからである。その本源的で一貫した矛盾は、猫と子羊のあいだの、すなわち戦闘的な動物と生け贄に捧げられる動物のあいだの矛盾である。この矛盾が存在の解体を迫るのだ<sup>14</sup>。

犬、という動物で真っ先に思い起こされるのが、長編小説『審判』の最後を飾る処刑場である。ヨーゼフ・Kはある朝二人の役人に連れ出され、心臓をナイフで一突きにされる。このとき彼は「まるで犬のようだ！」<sup>15</sup>と叫び、「恥辱は彼よりも長生きするように思われた」<sup>16</sup>と物語の幕は閉じる。この作品はヨーゼフ・Kが冒頭で身に覚えのない罪で突如逮捕される場面から始まるが、彼は逮捕されても日常生活を送るにあたっての自由は保証されていた。仕事も友人との交際も逮捕前と同様に行うことができた。しかし結末において、彼は人間固有の自由がついに剝奪され、犬に成り下がる。カフカの描く犬とは、人間であれば当然の権利、すなわち生命や財産だけでなく、いわば尊厳のようなものを持たない、ないしは失った動物の典型として用いられている。人間がもはや逃げ道を失ってしまう最終局面での象徴である。エムリヒは「犬は[中略](自由を)失ったことを知っている。だからこそ物語『雑種』の中で、犬は泣くのである」<sup>17</sup>と解釈し、ヴァルター・ゾーケル(1917-)は『審判』のヨーゼフ・Kを引き合いに出しながら、「請願し、乞い、顔色をうかがい、嗅ぎまわり、なだめすかし、切望しながら権力に擦り寄るとき、彼らはみな本質的には犬と化している。さもなくとも絶望的に分裂している『雑種』がさらに犬になろうと欲することは、ただ単にもう一つの分裂が加わったというだけではなく、それは希望のない無力、自己の存在の隷属性に対する絶望の表現であり、己という存在の庇護、認知、確認への憧憬である」とも述べている。

人間の富は忘却されたものの中にあり、最も遠くの時代に忘れ去られたものとの交流がなければ、どれほど貧弱な人生しか送れないだろうか、とヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)は嘆く。現在を深みへと誘うため

に、過去は忘れ去られる必要がある。そしてカフカの描く奇異な形象を、現代でも古代でもない、現実でも神話でもない、あるいは同時にどちらでもある空間で発見するという。二つの動物、動物と人間、二つの異なった形象を衝突させることは、ベンヤミンが言うところの、忘却と記憶を再構築した作業の結果なのだろう。

子羊から子猫、そして犬へと姿を変えながら徐々に人間の雰囲気醸し出す、この奇形とも言える不思議な動物は、ユダヤ教の罪の教えより誕生したのかもしれない。個々の動物に表象としての意義も隠されていることだろう。だが、動物界のどの種にも属さない、中途半端な進化を続ける生物をカフカが描いたのは、ダーウィニズムの影響が最も大きいように私には思われる。とりわけ遺伝を強く意識させる筆致や各種動物間の形態変化の発想は、当時盛んだった進化論の言説の中に生まれ出たものであろう。当時エルンスト・ヘッケル(1834-1919)<sup>18</sup>に代表されるドイツの科学者たちは、研究や講演を通してチャールズ・ダーウィン(1809-1882)の教説をドイツに広めていた。ヘッケルはダーウィンの一元論をドイツ語圏に普及させた最大の功労者であり、カフカの生まれる前年の1882年に、ゲーテの『植物変態論』や『動物変態論』、そしてジャン＝バティスト・ラマルク(1744-1829)やダーウィンの進化論について、重要な講義を行っている<sup>19</sup>。あらゆる生物は存在の大なる連鎖の中に包摂されるというダーウィンの進化論は、こうしてドイツ社会に次第に受け容れられていく。カフカ自身もまた、ギムナジウム時代にすでにダーウィニズムの思想に触れている。16歳のときには、ダーウィンの『種の起原』(1859)やヘッケルの『世界の謎』(1899)を非常に熱心に読んでいたという<sup>20</sup>。それだけの知識を持ちながら、なぜカフカは『雑種』において、あえて現実には存在しえない個体を造り出したのであろうか。

## 2 奇形としての雑種、正常とは何か

子羊と子猫の雑種であるこの動物は、あらゆる動物の定義から逸脱している独自のものである。子どもたちが猫や子羊を連れてきても、お互い

がお互いを同類だとは認識しない。「動物の目で互いに静かに見つめ合い、相手の現存を神の造り出した事実として受け容れ合う」<sup>21</sup>だけである。すべての動物の範疇から外れていて、どうやらその種族では唯一の存在らしいという意味において、この雑種の動物はすでにまるで人間のようでもある。動物たちが我々人間を見るとき、多くの場合、その眼差しからは同類を確認するような感情は読み取れない。まるでこの奇妙な雑種の動物を眺めるように、相手もまた神の被造物であることを認めながらも、全く相容れない別の種であることを同時に悟るのである。

さて、この奇妙な動物を実際に目の当たりにすれば、物語中に登場する近所に住む子どもたちのように、無邪気に観察などしていただろう。まるで恐怖映画を見ているかのように、警戒し、嫌悪し、そして排除しようとするのが常識的な行動だといえる。どの生物も周囲の環境の有為転変とは対照をなす特異な「堅固さ」に価値を置いており、変形に対する抵抗というかたちでその堅固さを主張するからだ<sup>22</sup>。生殖が種を保存するための行為であることは当然だが、同時にそれは可能な限り完全な形態を残すという複製行動でもある。すなわち雑種とは、種族を超えた動物同士の生殖行動の結果であり、同系交配の禁忌を犯した交雑の結果である。雑種には同形態を保存するという意志が働いていない。神が示した表を歪め、種の持つべき慎みを放棄し、型破りな放縦の結果生み出されたものが雑種なのである<sup>23</sup>。子羊と子猫の形態を持つこの雑種は、どちらの種から見てもその外観は奇形である。一つの種の形態を保持できずに、神の定めをないがしろにしている存在である。その姿に対する危機感が、見るものに警戒感や不快感を起こさせる。とりわけその拒絶反応が大きいのは人間であることは疑いない。先ほどの引用にあったように、子どもたちが連れてきた動物とこの雑種は、互いに「相手の現存を神の造り出した事実として受け容れ」ているのだ。それではどうして人間のみが予期せぬ奇形に対して身構えてしまうのだろうか。

人間が他の動物よりも繊細に感じ取る美醜の感覚と、可能なかぎり同じ形態を子孫として残したいという種の保存の法則が、巧みに結びついて

いることがその原因であると考えられる。「病は、それが身体の形態を変化させるとき、醜の原因となる」としたカール・ローゼンクランツ（1805-1879）は、18世紀半ばに醜の美学を目指した。そして病、奇形、不恰好など、医学的に見て健康の範疇から外れるものが醜の概念と結び付けられる。当時、社会を恐怖に陥れた梅毒、結核、アルコール中毒などは、人間が根源的に所有している何かしらの絶対的な美の基準から外れているとされ、その個人が病に冒されるばかりでなく、その個人が所属している社会にまで伝染するとされた<sup>24</sup>。結核のように集団へと感染しやすい伝染病だけでなく、アルコール中毒や個人の性格や体質にいたるまで、医学的な裏付けを持たないままに、伝染可能な対象として扱われた。さらにこの伝染への恐怖は時間的、すなわち世代を超えた伝染の恐怖へと発展する。例えば結核患者との性交渉を例に挙げれば、身分や階級、また、人種を超えた性交渉は倫理的に許されたが、子孫をつくることだけは一般的に許されざる行為であった。子孫に病気が直接的に感染しなくとも、親世代の病的な刻印が遺伝してしまうことを忌み嫌ったからである。また同時に、これは結核患者から醜い子孫が生まれ、その子孫の増殖により、共同体全体が汚されてしまうことを恐れたからであり、衛生学的関心だけでなく社会学的関心からも、結核患者は子孫を残すことを強く制限された<sup>25</sup>。

共同体の純血を望むという病の社会学的な捉え方を採用するならば、その人間が属する社会の維持と存続をもたらすのは健康な個体であり、それは美しく、善であり、反対に社会の破滅を誘うのは病気の個体であり、それは醜く、悪であるという二項対立に帰結する<sup>26</sup>。したがって病に罹患した者、そして周囲に何かしら病の徴候を見せる者は、その共同体を維持、存続させるための障害とみなされて排除されてしまう。善悪、美醜、そして健康と病気。これらの認識がヨハン・カスパー・ラファーター（1741-1801）に代表される観相学者の主張と結びつき、人間の表面に現れた身体的特徴が、病や性格などの外観からは本来見えざる分野を表象していると考えられるようになる。羊猫という奇妙な外観の雑種に対して我々が思わず尻込みしてしまうのは、醜いもの、病めるものに対する拒否反応であり、

その種が子孫を残せないことを見越し、そして我々の共同体に悪影響を及ぼすことを危惧するからである。好奇心旺盛な子どもたちが「ほく」に向かって、「どうしてこんな動物がいるの」「死んだあとはどうなるの」「なんで子どもを産まないの」<sup>27</sup>などと畳み掛けるように尋ねるが、彼らの疑問はその雑種の動物の誕生、寿命、そして子孫に関してであり、真に的を射たものばかりである。

しかし、共同体を汚すとされた病的な、いわゆる正常ではない外見とはどのようなものなのか。病的な外見と異常な外見とは同じものなのであろうか。健康的な外見は本当に正常と言えるのであろうか。そして、そもそも正常とは何を尺度にして語られるべきなのであろうか。

アンドレ・ラランド(1867-1963)の『哲学辞典』(Vocabulaire technique et critique de la philosophie)では、「正常な」の語源である *norma* が定規を意味していることから、「正常な」とは、右にも左にも傾かないもの、すなわち二つの方向の生じるちょうど中央に位置しているもの、と定義している<sup>28</sup>。これを文字通りに解釈すれば、極端な性質を一切排除した中道に位置する規則正しい姿、という意味であるから、最も大多数の個に見られるような、測定可能な性格の平均を算出したものが「正常な」とみなされるべきである。しかし、「正常な」という言葉自体に、その言葉を発する人間の価値判断の意味合いがどうしても含まれてきてしまうために、「正常な」という言葉の語義には、二つの解釈が存在するのが実情である。第一に、統計的な調査によって表される事実、すなわちある一つの特性に関して行われた測定の平均値に照らし合わせて、その特性を有する多数の個人に対して用いられる。第二に、形而上的に理想とされる状態であり、これを尺度として対象を分類するために用いられる<sup>29</sup>。現実に存在している多種多様な個体を網羅的に調査し、ごく一部の誤差を除いて平均値を算出することで、生命の法則を見つけ出すのが前者だとすれば、本来的に現実化されないかもしれない理想とされる姿を提示し、生命の秩序を訴えるのが後者である。もっとも、医学においてそうであるように、「正常な」という言葉を両義的に用いることは多い。身体のある器官が「正常な」状態であると

いうことは、平均的で通常な状態でありながら、同時に理想の状態でもある。何かしらの病に罹患して治療を行う場合、それは通常の健康を回復するためでもあり、理想的な状態を希求してもいるからである。

しかし生命の法則を見つけ出すにしても、生命の秩序を提示するにしても、それらの範疇からこぼれ落ちる個体は必ず存在する。しかし、科学者たちは自然の法則を本質的で不変の要素とみなしており、個々の現象をその不変の要素の近似的な見本として、しかし想定される合法的な実在を完全には再生産することのできない見本として扱うのである。フランスの生理学者であり医師のクロード・ベルナル（1813-1878）は『実験医学序説』（1865）の中で以下のように言う。「自然はどんな事物でも理想型を持っており、そのことは確実であるが、しかしそのような類型は決して実現されない。仮にそれが実現されるとすれば、個人はいないことになろうし、誰もが互いに似ていることになろう」、「真理が類型のうちにあるならば、実在はいつもその類型の外にあり、実在はたえず類型と異なっている」と<sup>30</sup>。

ここであらためてカフカが描いた二つの動物、子羊と子猫について考えてみる。羊に関して言えば、まず真っ先に私の頭に思い浮かぶのは縮れ毛と角である。その角は螺旋状であったり渦巻状であったり、様々な形態の角が存在するうえに、雌雄どちらも角が生える種もあれば、雄にしか生えない種も存在する。また、放牧の際の手間を省くために角がない羊も人工的に増やされたことから、角の種類や有無だけで羊であるかそうでないかを定義することは難しい。一方、四足歩行であること、二つの目や耳、それから鼻と口を持っていることなどは、哺乳類全般に共通しているために羊の特徴とは成り得ない。したがって、上記の諸条件に加えて、ウシ科の草食動物であり、32本の歯を有していること、強い集団性を持つために単独で行動することを嫌うこと、その羊毛の有用性から歴史的に早い段階から家畜化されていたことなどを併記することになる。一方で猫はどうか。人間の愛玩用として、またはネズミなどの害虫を捕食してくれる効果を期待して人間に飼われている肉食動物である。獲物を捕食するための柔軟性

と瞬発力に優れ、足音は小さく、体臭も少ない。獲物を一瞬で仕留めるために、牙と鉤爪を常に研ぎ澄ませている。また、羊とは異なり、その両目が前方に向けられていて、対象を正対視する点はむしろ人間に近い。『雑種』に登場する動物を改めて観察すると、体軀の大きさと格好は子羊の特徴を受け継いでいるが、頭と蹴爪、柔らかくてぴったりと身体にくっついている毛並み、そして、窓敷居で日の光を浴びながら身体を丸め、のどをゴロゴロ鳴らす習性は、紛うことなく猫のものである。しかし、獲物を仕留める機会をものにしたことがないという一文で、やはり通常の猫とは異なっていることを我々は再認識させられる。

しかし、科学者の視点においては、不変要素からはみ出した個々の独自の現象、すなわち偏差や変異は、一つの失敗、欠陥、不純なものとされる。そして独自性は法則性から外れた不規則なものだけではなく、同時に不条理なものともみなされてしまう。非合理的な個体に見られる偏差は、人間の計算では単純な定式の同一性に還元できない「逸脱＝異常」として現れ、自然の誤謬、失敗、あるいは浪費として叙述される<sup>31</sup>。半ば猫、半ば子羊であるこの父の遺産は、その外見が両種の間中に位置しているだけではなく、「月夜の軒樋が大好きな散歩道」<sup>32</sup>にもかかわらず「ニャオとは鳴けず、鼠に対しては嫌悪の念を抱く」<sup>33</sup>点から考えて、その性格もまた中途半端である。このような個性を法則性にそぐわないものとして認識するかぎり、猫の範疇にも羊の範疇にも入らない失敗作となってしまう。

それでは、カフカはこの雑種の生物を、その種の平均値からも、人間が希求する理想的な美ともかけ離れた、正常ではないものとして忌み嫌っているのだろうか。その疑問には、はっきり否、と答えられる。物語中の「ほく」も「この動物にとっては、ひょっとしたら肉屋の包丁が救いなのかもしれない」<sup>34</sup>と命を奪ってこの種の絶滅を計ろうとするが、すぐに「相続物である動物に、そのような救いを与える訳にはいかない」<sup>35</sup>と考えを改め、息を引き取るまで見守る決心を固める。すなわち、この奇形種の存在をありのまま受け容れ、奇妙な存在だと気づきながらも、その様子を温かく観察することに終始している。その境地に至った理由を、ここで三点

列挙する。第一に、ダーウィニズムに関心のあったカフカは、個体差が失われて柔軟性を欠き、硬直した形態のみ残されてしまった場合に、その種が真っ先に終末に近づいていくことも、同時に知っていたであろうということだ。進化の過程で淘汰されずに生き残った真に「正常な」種こそが、逆に何らかの変異遺伝子を有した個体を含有してきたという矛盾にも、カフカは気づいていたことだろう。第二に、19世紀に誕生した発生学の視点によれば、奇形とは発達の停止状態であるとみなされていた。本来ならば乗り越えられる一段階に、発達が固定されることであり<sup>36</sup>、その種の発達を俯瞰的に眺めた場合、それは奇形でも異常でもなく、正常な状態の一時期に過ぎないと解釈されたのである。第三に、生命に見られる各々の独自性を、実在的な類型に準拠可能な存在ではなく、生命上の偶発的な成功に準拠する可能性を秘めた価値ある存在とみなしたとき、不変の要素そのものの定義が崩れ落ちることが挙げられる。成功した形態と失敗した形態という分類は、現在の人間が持ち得る知識を総動員して拵えた仮の分類に過ぎず、両者それ自体においてア・プリオリに差異はないからである<sup>37</sup>。以上の三点から、カフカの描く子羊も子猫も我々が目にするような通常の種とはその姿が異なっているものの、直接的に異常である、または不条理である、と断ずるのは軽率な行為であると言わざるを得ない。その動物の個性は種の保存の観点から必要不可欠であり、奇形体というのは発生学的には「正常な」移行時期の一端であり、そしてそもそも「正常な」状態であるかどうかは、当代の科学の進歩状況如何によって分類されるに過ぎず、同時に美的理想を求める人間の主観を排するのは極めて難しいことを、カフカは我々に示唆しているのではないだろうか。

### 3 整形手術による奇形部の切除

奇形とは発生学において、発達における一時的な状態とみなされていたこと、したがって「正常な」状態の一部であると解釈できると前項で述べた。一方で、奇形と異常性の関係において、エティエンヌ・ジョフロワ・サンティレール（1772-1844）は異常を「変種」「構造欠陥」「部位異常」「奇

形」の四種に分類して説明している<sup>38</sup>。「変種」は軽度の異常で、不格好さは一切生じない。「構造欠陥」は解剖学的に重くない単純な異常で、肛門不全などがこれに該当する。「部位異常」は重い異常ではあるが、どのような機能の障害にもならないし、外部には目立たない。そして「奇形」とは非常に複雑で重い異常であり、機能の遂行を不能にし、その種が通常示す形態とは異なる欠陥形態を生み出すものとした。サンティレールの「奇形」とは異常が表出した際の一形態であり、カフカの描く半ば子羊、半ば子猫の動物は、この四種の分類に従えば明らかに「奇形」に属している。カフカが好んで動物の奇形体を描いた理由は、その動物自体がもつ特殊性を表したいというよりも、むしろ動物を用いることで何かを隠そうとしているように私には感じられる。カフカは人間存在の隠された重要な側面を直視できるように、いつも動物を物語に用いているからだ。それによって彼は、普段であれば背景に押しやられている人間の本性の一部を浮き上がらせようとする。この『雑種』で描かれている羊猫も、名前を与えられないまま飼われている。カフカは各々の事物に付けられている名前を故意に他のものとすり替えることで、所与の名前から我々が受けるはずの先入観を失わせ、対象を公正な目で観察させようとしているのだ。それではカフカは何を隠そうとしていたのか。おそらくそれは人間の奇形性であり、その奇形性によって外観が不格好となり、他人に何か病的な印象を与えてしまう点だったのではなかろうか。

カフカは、結核の症状がすっかり悪化して、ベッドから離れることが難しくなった頃、キールリングにあるホフマン・サナトリウムに滞在していた。このサナトリウムは院長であるフーゴ・ホフマンがその家族とともに経営している小規模なもので、患者数は少なく、それゆえ隔々にまで配慮が行き届いていた。このサナトリウムに集まった患者たちは快復への希望を失った者ばかりで、しかも本人たちもそのことを知っていたという<sup>39</sup>。その患者の中には郷土詩人のローラント・ヘニングも含まれていた。ヘニングはサナトリウムでカフカとも知り合っており、ホフマン医師の代診でやってきたフリッツ・ミュラー医師に「もうひとり、プラハ出身の詩人が

いる」とカフカの話を話している。そのヘニングの父親、カール・ヘニング博士は、解剖学教材用の蠟製人体模型であるムラージュを制作することに秀でており、その芸術的才能によって、傷跡や欠損した鼻の代用品などを多数作り出し、医学界を驚愕させた人物であった。その模造品はあまりに自然だったため、他人に恐ろしいほど醜い印象を与えるようになっていた患者たちに、本来の外観を取り戻させ、自己意識を回復させるのに一役買っていたという<sup>40</sup>。小規模なサナトリウムで共に時を過していたカフカとヘニングが、身体のパーツを造り出すなどという興味深い話題を看過できたわけがない。カフカが自分の身体において忌み嫌った部分の一つに鼻があった。鼻、という身体の部位がもつ記号は、はっきりとカフカのユダヤ性を示しており、その形態は少なくともユダヤ人自身にとって、他の西洋人と比べて奇形であるとみなされかねない要素だったからである。

19世紀後半までには、西方ユダヤ人はその言語、服装、職業、居住地区、髪型において、他の西洋人と区別がつかなくなっていた。伝統的にユダヤ人を他の民族と見分ける指標とされていたその肌の浅黒さも、内婚的婚姻関係が減り、世代交代を繰り返すうちに、以前ほど鮮明な刻印ではなくなっていた。1886年にルドルフ・ウィルヒョー(1821-1902)が一万人以上のドイツ人児童を対象に行った調査によれば、肌・髪・目の色においてドイツ人住民とユダヤ人住民を区別することは全く不可能であった<sup>41</sup><sup>42</sup>。ユダヤ人の多くは、当時すでに白い肌と青い目、そして金色の髪を持っていた。しかし、白さを増す皮膚とは異なり、世代を超えても矯正できなかったのが鼻である。「ユダヤ鼻」と揶揄された弓型で凸型の鷲鼻は、世事に抜け目がなく、他人を深く見極めて、実利的方面に役立つ才に優れる、ユダヤ人の象徴であるとされた<sup>43</sup>。1928年に刊行された『ユダヤ人と非ユダヤ人のあいだに生まれた「間の子」』で論じられた人類学的研究によれば、「ユダヤ鼻」は混血でも優勢となり、遺伝的記号として認識されると書かれている<sup>44</sup>。非ユダヤ人の観相には絶対に現れることがない異常で奇形の鼻を、そして肌のようにその痕跡を薄め消すことが難しいとされたその鼻のコンプレックスを、ユダヤ人はどのように克服したのだろうか。

その一つの解決法を提示したのが、ユダヤ人外科医のジャック・ヨーゼフ（1865-1934）だった。ベルリンに整形外科医院を開業していた彼は、1898年に成人男性に対して初の現代的な整形手術を施した<sup>45</sup>。同年のベルリン医学会で、完全に健康そうに見える個人に対して、あえて手術を行ったことの科学的意義を述べた。それまで他人にじろじろと見られていたせいで憂鬱になってしまい、社会生活を送ることができなかった患者は、手術の成功がもたらした効果により、その心理的障害が完全に癒されたという<sup>46</sup>。その後もヨーゼフは「ユダヤ鼻」を「異教徒（キリスト教徒）風の輪郭」にする手術を繰り返し行った。彼をはじめ同時代の多くの整形外科医が目標としていたことは、ユダヤ人の身体を作り変えて、彼らの起源を隠し、他の人種目から彼らを目立たないようにすることであった。それによってユダヤ人として見られることを少しでも避け、迫害や嫌がらせを受けることから身を守ろうとしたのである。

前項で述べたように、健康と美、そして病気と醜がそれぞれ結びつけられていた時代においては、醜い病の徴候を見せる者は、その子孫にいたるまで災いをなすものとされ、所属する共同体を維持、存続させるための障害とみなされていた。19世紀末になってジャック・ヨーゼフに代表されるような美容整形外科医がその地位を確固としたことは、外見の美醜によってその人物の内面を計ろうとした時代の風潮と大いに関係していると思われる。すなわち、外科手術で自らの外見に手を加えることで、その部位の機能を改善、もしくは回復するだけでなく、醜と病の徴候を取り去り美的に再建することで、ユダヤ人たちは共同体から排除されないようにするための一種の予防措置を講じたのだ。実際に鼻の形態や欠損はユダヤ人やアイルランド人といった人種を連想させるだけではなく、梅毒などの病気の症状としても、人びとの脳裏に真っ先に浮かぶものであった。16世紀から続く奇形がもつ負のイメージが、人種や性病といった特定のグループと結びつき、20世紀に入ってもなお、社会的不安を引き起こしていたのである<sup>47</sup>。こうした悩みの種である身体的奇形部位を矯正することで、身体だけでなく結果として心も癒されることが、美容整形外科によって明らかと

なった。美容整形を希望したユダヤ人の大半は、ユダヤ人という特定のグループの構成員としてではなく、ただありのままの自分を見てほしい、個人として扱ってほしいとの願いから、手術を希望していた。カフカ自身もサナトリウムでのヘニングとの会話で興味を掻き立てられ、おそらく自らのコンプレックスを再認識させられたことだろう。子羊と子猫という二つの動物を、まるでギリシャ神話に登場するキマイラのように合体させ、さらに犬の要素まで継ぎ接ぎして与えたこの奇妙な雑種動物は、19世紀から20世紀にかけての奇形概念と、またその奇形部位を変形または切除することを可能にした外科手術の普及の中で、カフカによって産み出された怪物であったのだ。

本稿では、フランツ・カフカの短編『雑種』を手がかりにして、彼の寓話物語に頻繁に登場する動物の奇妙さについて考察した。子羊から子猫、犬、そして人間へと近づくその奇妙な雑種は、カバラ思想をもって読めば贖罪に生きる哀れな動物として我々の目に映る。この雑種を、その種の平均値から逸脱した、もしくは人間が希求する理想的な美とも似つかわしくない、すなわち「正常な」動物ではないものとして捉えれば、周囲に忌み嫌われ、疎外される存在となるだろう。しかしダーウィニズムに精通したカフカは、個体差が失われて柔軟性を欠いた形態しか持たない種は、必ず絶滅するであろうことを知っていたに違いない。それではなぜ異種の動物の特徴を内包しているこの奇形動物を創造するに至ったのか。その発想の背景には、美を追求し、身体に刻まれたコードを自由に取り外しできる、美容外科手術の誕生と普及があったように私には思われる。自らの属する民族や内面的性格を、隠し立てせず世間に露呈し続ける身体の部位は、生涯にわたって自らのコンプレックスとなり、そして共同体から迫害される原因も孕んでいる。その障害を切除し、場合によっては代用品で埋め合わせをするという、当時においては革新的な技術が、カフカに継ぎ接ぎの動物を描かせたのではないだろうか。

物語の結末で、「ほく」は包丁をこの雑種に向けて、ひと思いに命を絶つてやろうとしたのかもしれないし、もしかしたら外科手術によって子羊と子猫、そして犬へと元通りの別々の「正常な」個体へと戻そうとしたのかもしれない。しかし「ほく」は包丁を手にするのではなく、しまいにはこの雑種が「自ずと息を引き取るまで待つ」<sup>48</sup>ことにした。雑種動物を生かしておくことで、今後どのようにこの動物を扱うべきかを、カフカは読者に委ねたのである。私は、カフカが動物を引き合いに出しながら、彼自身へ、そして全ての人間たちへ精一杯の警鐘を鳴らしているように思えてならない。ユダヤ人をはじめ各々が気に病んでいる奇形性など、正常と異常の概念が明確に区別できた上に初めて存在しうるもので、「正常な」状態であるかどうかは、そこに美を追求する形而上的精神があるかぎり、そもそも判断者の主観に左右されるものだからである。

註

- 1 Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes. Fischer Verlag. Lizenzausgabe von Schocken Books. New York. 1946. S.110  
なお、本稿ではカフカの既訳にこだわらず、引用に関しては全て訳出し直した。
- 2 Ebd. S.109
- 3 Ebd. S.108
- 4 Ebd.
- 5 Ebd.
- 6 Ebd. S.109
- 7 Ebd.
- 8 Ebd. S.108
- 9 Ebd. S.110
- 10 Ebd. S.109
- 11 マルト・ロベール：『カフカのように孤独に』、東宏治訳、人文書院、1985年、276頁
- 12 K. E. グレーツィンガー：『カフカとカバラ』、清水健次訳、法政大学出版局、1995年、157-158頁
- 13 同上、170頁

- 14 Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Athenäum Verlag. Frankfurt am Main. 1958. S.138-139
- 15 Kafka, Franz: Der Proceß. Fischer Verlag. Lizenzausgabe von Schocken Books. New York. 1946. S.272
- 16 Ebd.
- 17 Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. S.138
- 18 ダーウィニズムをドイツ語圏に普及させたイエナ大学の動物学者。ダーウィンの進化論を無機物の世界にも応用し、有機物と無機物を統一的に把握しようと試みた。
- 19 マーク・アンダーソン：『カフカの衣装』、三谷研爾・武林多寿子訳、高科書店、1997年、212頁
- 20 同上、215頁
- 21 Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes. S.109
- 22 ジョルジュ・カンギレム：『生命の認識』、杉山吉弘訳、法政大学出版局、2002年、202頁
- 23 同上、204頁
- 24 サンダー・L・ギルマン：『健康と病』、高山宏訳、ありな書房、1996年、65頁
- 25 同上、78-80頁
- 26 同上、66頁
- 27 Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes. S.108
- 28 ジョルジュ・カンギレム：『正常と病理』、滝沢武久訳、法政大学出版局、1987年、102頁
- 29 ジョルジュ・カンギレム：『生命の認識』、180-181頁
- 30 同上、182頁
- 31 同上、186頁
- 32 Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes. S.108
- 33 Ebd.
- 34 Ebd. S.110
- 35 Ebd.
- 36 ジョルジュ・カンギレム：『生命の認識』、211頁
- 37 同上、187頁
- 38 ジョルジュ・カンギレム：『正常と病理』、111-112頁
- 39 ロートラウト・ハッカーミュラー：『病者カフカ』、平野七濤訳、論創社、2003年、129頁
- 40 同上、132-133頁
- 41 サンダー・L・ギルマン：『フロイト・人種・ジェンダー』、鈴木淑美訳、

- 青土社、1997年、98-99頁
- 42 一方で、同時代の非ユダヤ人にその外見が似れば似るほど、いっそう自らの差異性に対して敏感になる者もいた。イギリス系ユダヤ人の社会学者であるジョゼフ・ジェイコブスや、ドイツ系ユダヤ人ヤーコプ・ヴァッサーマンなどが挙げられる。
- 43 サンダー・L・ギルマン：『ユダヤ人の身体』、管啓次郎訳、青土社、1997年、250頁
- 44 同上、252頁
- 45 鼻の縮小手術自体は、19世紀前半から外科医によって行われていた。しかし、当時は麻酔や消毒法がまだ発達しておらず、現代の整形手術とは性質が異なっていた。
- 46 サンダー・L・ギルマン：『ユダヤ人の身体』、257頁
- 47 サンダー・L・ギルマン：『健康と病』、101頁
- 48 Kafka, Franz: Beschreibung eines Kampfes. S.110